

助動詞の接続：文語におけるその変遷

水野, 清

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

14

(開始ページ / Start Page)

47

(終了ページ / End Page)

62

(発行年 / Year)

1966-03-21

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019145>

助動詞の連接

——文語におけるその変遷——

水野清

橋本進吉博士は、その著『国語法研究』（同博士著作集第二冊）に収めた「助動詞の分類について」という論文のなかで、つぎのよう

に言う。
助動詞、たとえば「ベシ」に推量・可能・当為・決意の意味があり、「ル・ラル」に受身・敬意・可能・自発などの多義があり、「もし意味によって分類するならば、かような種々の意味をことごとく収むべき多くの部類を要するわけであって、ふつう行なわれているような10種内外の部類では到底不十分である。……おのおの助動詞において、もつとも多く用いられる意味、または根源的なものと認められる意味をもって、その助動詞の意味を代表」させるといった「一語一義主義」を取るとしても、その代表的意味なるものがさだかでない。「ケム、ジ、マジ」などは、ふつう推量の助動詞とせられているが、むしろ「ケム」を過去の部類に入れ、「ジ、マジ」を打消しの助動詞のなかに入れることもできる。また「ジ、マジ」を「ズ、ザリ」とともに否定の助動詞とし、その他のいっさいの助動詞を肯定の助動詞とすることもでき、「標準のとりかたによって、

大きくも小さくも分類することができる。

と。われわれは、助動詞の意味を明きらかにするために助動詞を分類すると思っている。しかし、橋本博士によれば、「これは、むしろ逆」で、分類によって分かる語義は、「概括的な、不完全な意味」でしかない。

こうして、文法上必要な、助動詞の分類は、意味だけを考えるのではだめで、「その意味の相違が、何か形の上にあらわれた文法上の区別に対応するものでなければならぬ。」

そうした立場から、博士は、(1)「活用による分類」(2)「接続による分類」(どんな種類の語につくか、そのどんな活用形につくか、による分けかた)を検討した結果、これが必ずしも「意味の分類」と一致しないことを明きらかにしている。

たとえば(1)によれば、推量の「ベシ、マジ」は、比況の「如し」とともに、形容詞的であり、同じく推量の「メリ」は、過去の「ケリ」とともに、動詞的である。(2)によれば、完了(ただし「リ」を除く)と過去(「ケム」を含む)と希望「タシ」は、いずれも動詞の連用形に接する点で同類となる。これでは「意味の分類」と一致

せぬことは明きらかだ。が、「接続による分類」は、意味上の分類と、かなりの程度に合致すること、を橋本博士は認め、かつ、この分類によって始めて、(a)活用しない語(たとえば名詞など)に付く助動詞(断定の「ナリ」「タリ」と比況の「如シ」と)、(b)活用する語にのみ付く助動詞(断定・比況を除いた他のすべてのもの)とに二分されるのであって、この点は「意味上の類別ともよく一致するのみならず、文法上たいせつなもの」と論じている。即ち、前者は活用しない語に付いて、用言たる資格(たとえば述語たる資格)を付与するものであり、後者は用言に付いて、種々の意味を加えるものである。

かくて、この論文では、結局のところ「なお一つの別の面から考えてみたい」とだけ述べられて、最後の解決は与えられなかった。けれども、橋本氏は東京大学での講義「助動詞の研究」において、「助動詞の連結の順序」による分類を試み、上述の「接続による分類」を、さらに大きく乗りこえて前進し、助動詞研究に一つの新しい展望を与えることとなった。これは、芳賀矢一「明治文典」付録の「活用連語一覧」(明治37年)や山田孝雄「平安朝文法史」「奈良朝文法史」(明治40年稿、大正2年刊)の「複語尾相互の承接」に学んだものではあるが、これらを飛躍的に発展させたものと言える。

橋本氏の分類の基準は、「連結の順序」であり、氏によれば、「日本語では、同じことばに、助動詞がいくつか重なり付くことがあり、その際、どれが先きに付き、どれがのちに付くという一定の順序が定まっている」ということなのである。

ところで、芳賀氏のは、明治期の普通文(当時の公用文に用いられた文語文)から「帰納したものらしく」つぎのようなものである。

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)
	使役	受身	敬語	打消	完了の時	普通の時	指定	法
書か	せ	られ		ず。				
書き			給ひ		たり	き。		
書く							なる	べし。
書か	せ	られ	給は	ざり		し	なる	べし。

芳賀矢一「明治文典」の「活用連語一覧」

山田孝雄博士のは、まず助動詞を複語尾と呼ぶ。これはいわゆる活用語尾に、さらに接続する語尾であるから、「複語尾」と命名したものであるが、「複語尾を有しうる用言は、動詞、形式動詞(す)、純粹形式用言の三類」(平安朝文法史)と言っているように、その用言(広義)のなかには、純粹形式用言として、(1)存在動詞「アリ」、(2)その形容詞などの熟語「カリ」「ナリ」(今の形容詞・形容動詞の語尾)、(3)動作存在動詞(動詞に完了の助動詞「リ」が付いたもの)、(4)説明動詞(断定の「ナ

リ)など種々のものを含んで複雑であり、「リ・タリ・ザリ・ベカリ・マジカリ」など、(五)を含む助動詞も、すべて形式用言「アリの」の「熟語」なりと考え、「純粹の複語尾相互の承接の例」とは見なかった。そのため、せっかく平安期の文章から、助動詞連接の実例を豊富にあげたにもかかわらず、「助動詞の連接順による分類を判然と打ち出す」ことが出来ず、橋本氏をして「規則を立てるまでに到らず」と批評せしめたのである。くわしくは「平安朝文法史」巻末付録「平安朝語と現代語との文法比較一覧」に収められた「複語尾相互の承接」(11~22頁)を参照されたい。

さて橋本博士自身が展開した新しい接続表は、つぎの如くである。

橋本博士の助動詞連接表

その意味		所属する活用形	活用形の完・不完
相の助動詞	I す, さす; しむ	未然形に付く	完
	II る, らる	"	
希望 "	III たし, たかり	連用形に付く	
完了 " (肯定の確定)	IV ぬ, り	"	
	V たり	"	
	VI っ	"	
否定 " (否定の確定)	VII ず, ざり	未然形に付く	命令形のみ欠
不確定 および 過去 (肯定の確定)	VIII べし, べかり; まじ, まじかり	終止形に付く	
	IX けり, めり	連用と終止	さらに連用ある いは未然も欠く
	X き, けむ; らし, らむ, む, まし, じ	連用と終止と未然	終止以下の形の み, 「じ」は, 已然も欠く

(注) じは ari をふくむ助動詞で、その ari 動詞のため、順序を乱すことあり、(例、「ベカラズ」は「ベクーアラス」だから)
 ① その所属する活用形は、だいたいうまく分かれている(意味上の分類と一致)
 ② 助動詞自体の活用形は、(VI)までは、みなそろっている。
 (VII)は命令形のみなし、終助詞「な」で補われる(例「行クナ」)
 (VIII)は欠けない。(命令形は、語の意味からして、ありえない)
 (IX・X)は、大部分が、終止、連体、已然の形のみ。

この新しい連接表では、芳賀氏の表にあった「給ふ」を動詞と同じように扱うべきもの(補助動詞)として除いた。また、芳賀氏の表にあった「なり」(断定)も、体言または准体言(例、「忘れざりし(Koto)なりけり」)を受けけるものであり、この「忘れざりし」は一固まりとなって名詞的連語を作り、前掲の順序はその連語の中だけで働き、「なり」以下には関係しないとして、除かれた。同じく断定の「たり」、比況の「如し」も、右の表から除かれたのである。

この表に見るように、助動詞連結による分類は、①助動詞の上に来る語の種類(体言か用言か)で大別し、②上に来る語が用言の場合は、用言のどの活用形に付くか③また、助動詞自身の活用はそろっているか、それとも不完全か、を考えており、④しかも、その分類は「助動詞の意味」とも関連している。③さらにこの分類は、助動詞が「他の語とともに文節を作る場合の結合上のきまり」を規定しているので、「文節の構造を論ずるのにも必要なこと」となった。

橋本氏自身「多少の例外、混乱はあるが」、と言っているように、この分類は、とくにIX・Xのあたりで多少混乱している。これは、思うに、上代に「けらし」(ケル・ラシの約か)あり、平安期に「めりき」があるため、「けり」「めり」をIXに、「らし」「き」をXに持っていたこと、その「けり」にはまた、上代「けらざや」という成句形のなかに未然形があり、活用形は四つ、「めり」も同じ四つの活用形をもつ。その点、Xのものは3活用形しかなく、「じ」は2活用形しかない、そのためにこれらをIXとして、最後に持って行ったものであろう。

が「解釈と鑑賞」(昭32・11月「古典解釈のための助動詞」特集)に収める佐藤喜代治氏の論文は、「じ」に已然形のある証拠として、

「うつぼ物語」の「罽葉の色かはるまであふことは賀茂の社もえこそ許さじ」(菊の宴)をあげておられる。「じ」をXの最後に置く必要もない。さらに「けらし」「けらずや」のような奈良朝以前の特殊な助動詞連接を、平安期のそれから区別すれば、この表はもっと簡単なものになるはずである。また、そのように時代を限れば、院政期の『栄花物語』に初例一つが見られる「たし」(國語研究所、山田巖氏の教示による)を別扱いすることも出来ただろう。さらに言えば、この希望の「たし」や相の助動詞が動詞と結合することによって、ふつう動詞の目的格たるものが、主格に転じ(例、「水をのむ」→「水がのみたい」、主格たるべきものが補格に転ずる(例、「猫鼠を捕らふ」→「鼠、猫に捕らへらる」、人猫をして鼠を捕らへしむ)といった格の変化を重視せられたことは、もっともであるが、そもそも、これらの「助動詞」が、真に助動詞なりや否やも考えてみる必要がある。そう考えて整理を試みたのが下欄の表である。

[0] グループを設けたのは、受身・使役の助動詞を「助動詞」の座からおろそうと考えているからである。その理由は、「交野の少将には笑はれ給ひけんかし」(源氏「帚木」)「人のそしりをもえ憚らせ給はず」(同上桐壺)の例のように、「給ひ」という補助動詞があるとき、受身・使役の助動詞はいつもその前に位置し、あとに来ることがなく、これに接続すべき「けん」「ず」は必ず「給ふ」の下に位置する。元来、用言↓補助用言↓助動詞(あるいは接尾辞)(行つて↓しまつた)と並ぶのが日本語の特性なのであるから、さきの例も「笑はれ」「憚らせ」全体が、受身動詞または使役動詞(この例では尊敬動詞)であるべきである。昔の「食はる」が「食

第1表 平安期助動詞の連接表

		未然形 ↓	
連用形 [*ただし「リ」は命 令形から]	[0] る・らる す・さす しむ	受身・使役	終止形 [*ただしラ変のみ は連体形から]
↓			↓
[1] り ぬ たり つ	完了	[2] ず(ざり)	打消
			[3] べし(べかり) まじ(まじかり) なり めり
			*推定 [根 拠あり]
[4] き けり けむ	回想	[4'] む(ムズ) じ まし まほし	[4''] らむ らし
			*推想 [根 拠あり]

* (0)~(4')は助動詞相互の承接順。例、「心にしるく思ひいでられぬべからむを言へ」(源氏若菜上)
 * ザリ・ベカリ・ナリ・メリ、これら ari 動詞を含むものは、順序をかえて、(1)の「ツ」に接し得る。
 なお、ほかに「ベカラズ」がある。

はれる」となり、それが現代語の可能動詞「食べる」を生み出すが、語源の説明でない限り、この「食べる」を二つに分ける人はあるまい。「笑はれけん」と「笑ひにけん」とでは、同列に論ずるわけには行かない。「に」と「けん」の間に「給ひ」を入れることは、全く出来ないからである。もっとも、多少の例外のないわけでもなく、「今よりのちは、ましてさのみなむ思う給へらるべき」(源氏、帚木)では、「らる」は「給へ」の下に付くことになる。いま源氏物語の用例を調べてみると、元来この謙譲の「給ふる」は、知られてゐる様に、「思ひ・見・聞き」の三語にしか付かない、源氏物語の一例「知り給へず」があるほかは、すべてこの三語に限られるが、とくに「思ひ給へらるる」の型は、「思う給へらるべき」「思う給へられぬべき」「思う給へられざりけり」等々、73例あるが、どれも「思う」だけに限られている。これが複合語「思う給へ得」とか「思う給へ定めがたし」(複合する形容詞は、四例みな「……がたし」のみ)とかを作る時には、きまつて「給へ」は「思う」に直接付けられるのであって、甚だしい例として「思ひ給へなむわづらふ」(竹河)の一例の如く、係りの助詞が挿入せられる場合もあり、この事は「思ひ給ふる」が固く一語に結合していたことを物語るものでもあり、他の一般の動詞と同日に論ずることは出来ないのである。しかもなお興味深いことは、「思う給へられ侍りて」(賢木)「思う給へられ侍る」(桐壺、須磨、宿木に3例)の様な例を見うることで、この点から見れば、「られ」はやはり「侍る」の前に位置すると言ふべきである。

以上のような厳然たる事実があり、山田孝雄「平安朝文法史」の言うように、すでに枕草子の異本の中に「東西をさせず、乞ひ取

り」といった事例も見られ(ただし三巻本には「させず」とある)、源氏物語の中では「習はせ」と「習はし」(動詞と認められる)とが同居している事実を参考すれば(松尾聡氏「国文法入門」40、41(参考)、これらの「助動詞」は、受身・使役の動詞を派生させる接尾辞以上のものではない。だから[0]グループは、この表から除くべきものと考えられる。なお、源氏、明石「かかりとて都に帰らむことも、まだ世に許されもなくは、人笑はれなる事こそまさらめ」須磨「なほ世に許されがたくて年月を経ば」(カッコは河内本)の様に、「許され」が名詞を形作ることに、「許されがたし」の様に、補助形容詞「ガタシ」の上に来て、全体で一形容詞を作っていることも、注目すべきであろう。「れ」を助動詞とみとめたいので「給ふ」「がたし」をも助動詞と認めようとする試みがある。現代語の「とけにくい」や「笑っている」の「にくい」「いる」をも、これらの人々は、「助動詞」と考えようというわけなのであるか。

[4]のグループからは「ま・ほし」を除くべきだと考えられる。「慰むと…聞けば語らま…ほしけれど…身の憂きことぞ…いふかひもなき」(和泉式部日記)で分かるように、一つの「助動詞」が和歌の二句目と三句目とに、車裂きにされて現れてくるという事実は、文法研究者たちは、どう考えるのだろうか。同様の例は、後撰集1088「白河の…滝のいと見ま…ほしけれど…みだりに人は…寄せじものをや」(中務)白河の太政大臣に会いたい、という歌である。伊勢物語の有名な歌「老いぬれば…去らぬ別れの…ありといへば…いよいよ見まく…ほしき君かな」や後撰770「津の国の…名には立たまく…惜しみこそ…すくも焚く火の…下にこがるれ」(三ノ親王、「すくも」字鏡に「もみがら」とし、また、芦の枯れたものとする——大日本

国語辞典)となれば、すでに古い形であるから当然だろうが、やはり二つに分かれている。だから、「まほし」は一つの助動詞と見ることはできず、どこまでも「語らま」||「語らむこと」それが「ほし」でなければならぬ。「語らま」で准名詞であり、「ま」は名詞的吸着語に准ずる。「会いたさ、見たさ」の「さ」が形容詞を名詞に転ずるのと似ている。してみれば「過ぐし侍りなま・ほしけれ」(源氏、乙女)は、「過ぐし侍りなむこと」「欲し」と理解される。

「ほし」はもちろん形容詞である。いわゆる願望の対象語が、奈良朝以前に「見が欲し」であり、現代で「パンがほしい」「水がみたい」であるということは、何か偶然でない事情が働いていると思われる。この「ま・ほし」は、山田孝雄氏が「まく欲し」「まく憂し」の熟語となったもの(平安朝文法史497頁)とし、三矢重松氏「高等日本文法」(増訂版・290頁)では「准助動詞」として「文語助動詞連結表」にあげていないものである(ちなみに三矢氏の表は、ズ・ジを一群、ム・マシ・ベシ・マジ・メリ・ラム・ラシを一群にまとめ、かつ、断定のナリをも表に加えたため、明確な分類の体を成すには到らなかった)。「熟語」「准助動詞」といった規定のしかたも、正しくないと思われるが、橋本氏の助動詞連結表が「まほし」を除いたことと並んで、一般の文法研究者とはやはり選を異にしていることが理解される。なお「ま・ほし」が、「らる・す・さす」の[0]グループにつくほかは、前掲の「なま・ほし」の如く、完了「ぬ」にしか続かないことも興味ある問題で、「欲し」の対象を示す「ま」には、ただの動詞(0)グループはこの中にはいる)を除いてはふつうの完了や過去、さては推想・否定などは続き得ないのが当然である。従って未来に事の成就するを示す「なむ」の名詞形

「なま」のみが、可能となったものである。そして、この「ま」によって、願いの対象が一つのイメージ化に達するものと考えられる。こうした点からも「む」を推量の助動詞とするのは誤りであり、山田孝雄氏の「設想」「仮想」というのが正しいと思われるのである。ちなみに「解釈と鑑賞」(昭32・11)で佐藤喜代治氏がロドリゲス「日本大文典」(1604~8)の説明をあげていられるが、それには、「ある動詞の否定形の『ぬ』の代りに『ま』、ある動詞では『まく』を置いて、そのあとに『ほしい』を添える。たとえば『聞かまほしい』『あらまほしい』『住ままほしい』『見まほしい』または『見まくほしい』など。」とあって、ロ氏の学んだ慶長ごろの日本人も、「ほしい」の付いたものと意識していたのであろう。

これと意味の似通った願望の「助動詞」タシをも、私の表では除いてある。これも助動詞ではなく、動詞の接尾辞とすべきだと考える。「解釈と鑑賞」(昭32・11)の小林芳規氏の論文によれば、俊成女(1254歿)の越部禪尼消息に「とりて見たくだにさぶらはざりしものにて候」「歌のことども申たく候おほく候にこそ見参もしたく候へ」などあり、山田博士校注・覚一本平家387頁には「西国へ下りし時も、今一度見参らせたく候しかども、大方の世の騒しさに申すべき使りもなく、罷り下り候ひぬ」とあり、傍線の二つの助動詞(?)が連接するその中間に補助動詞「候ひ」が割りこんでくる。即ち、さきの[0]グループの場合と同じであり、「タシ」が補助動詞「候ふ」の上に位置する故に、これを助動詞と認めることは出来ないのである。したがって、「タシ」もまた、動詞の希望態(宮田幸一氏「日本語文法の輪廓」による名称)を作る接尾辞と見ざるを得ない。「参らせ候たし」とはならないのだから。小林氏も述べ

ていられるように「タシ」の上に位置する語は、動詞以外に〔0〕グループの「助動詞」のみで、結局、私の言う動詞のみとなる。橋本氏は格の転化を強調されたが、「水がのみたい」の主体は、依然として「わたたくし」であって、「水がすくない」などの形容詞とは、性質が違っていると言うべきであり、「のみたくて」には常に「のみたく思つて」という主体の動作への衝動を示す点で、「水がすくないて」のような状態・性質を客観的に表わす形容詞とは趣きを異にするものと見られる。

前の連接表で分かるように、断定(なり、たり)比況(ごとし)を除く、用言所属のすべての助動詞は、動詞の未然・連用・終止につくのが原則である(形容詞もその本活用「く・し・き・けれ」の連用形「く」(シク活用は「しく」)に動詞ariを付けた補助活用「かり・かり・かる」から助動詞に接するので、結局E. 動詞が助動詞につくことになる)。動詞の活用形のうち、上の三つの形は助動詞に接するためのものであり、下の終止・連体・已然の三つの形は「ハ・モ」「ソ・ナム・ヤ・カ」「コソ」にそれぞれ対応する言い切りの形であって、これを山田孝雄氏は第一終止、第二終止、第三終止と呼んでいる。さいごの命令形は即ち命令終止であり、これまた、言い切りの形である(松尾捨次郎氏は動詞の活用をズ・テ・ベシ・コト・ドモ・ヨを付けて考えるよう説いていられるが、その「テ」はもとをただせば「ツ」の変化であることを考えてほしい)。

さて連接表に見るように〔1〕グループは〔2〕以下のすべての助動詞に接するもので、すべての活用語に必要な三終止の形、即ち終止・連体・已然の三形はむろんのこと、すべての活用形6をそなえてい

〔2〕の「打消」は形容詞と似ていて(「行カナイ」が形容詞的で

あることを思え)命令形を持たないが、「……すな」の形は持つ。〔3〕のグループも形容詞的であるが、当然推定の「ベシ」、その打消「マジ」と、聴視覚推定(いわゆる推定・伝聞)の「ナリ」「メリ」とに分かれる。前者は係り結びに必要な終止・連体・已然のほかに未然・連用を持つが、後者は「ナリツ・ナリシ・メリツ・メリシ」の連用形のみを合わせ持っている。〔4〕〔4'〕のグループは〔1〕完了〔2〕打消に上接することがなく、したがって未然・連用の二形は不必要であって、結局、係り結びに必要な三形、終止・連体・已然のみを持つのである。〔4〕〔4'〕グループは、お互いに接し合うこともなく(意味上、当然そうなのである)、したがって未然・連用の必要がなく、用言に助動詞の連接した文節のなかで、いつもその文節の最後に位置する(絶えにたるらん、成りぬめりし)。こうして〔4〕〔4'〕グループは、係り結びに必要な終止・連体・已然の三形のみで十分用が足りるのである(ただし「まし」の未然形とされる「あたませば」は、古代的用法である)。

つぎに、〔1〕を「り・ぬ・たり・つ」の順としたのは、「立てりなむ」や「なりたり」「おぼしたりつる」という連接順に並べたものである。〔3〕グループについては源氏物語に「まじかべい」という例があるから、その順とも考えられるが、「まじか」は不当の意「べし」は推定の意である所からおこる矛盾、つまり「べし・まじ」が当然と推定との二義を持つ所からの矛盾、であるから、やはり肯定「ベシ」否定「マジ」と配列した。これらは「ベカンナリ」

「ベカンメリ」 「マジカンナリ」 「マジカンメリ」となつて、「ナリ・メリ」に常に先行する。後者については「そこに人々つどへらるな(ン)めり」(宇津保物語・岩波大系本Ⅱ13ペ。「アナタハ、イイ

第2表 「源氏物語」を中心とした助動詞連接表

	①完	了	②打	消	③推	定	④過去	き	④過去	けり	④過去	けむ	④'	仮想	む	④'	仮想	まし	④'	仮想	まし	④'	推	想
り	な-む つる		ず	ざり-し	べまじり まじり	き まじり	つなり るなり めしけむ, まし	き	けり	けむ	む	まし	らむ											
ぬ	たり ぬ-べけれ つ-らむ		ぬ		べしかり めりし つなり るなり めしけむ, まし	き	けり	けむ	む	まし	らむ らし(和)													
たり			ず	ざ(り)	べまじり まじり	き	けり	けむ	む	まし	らむ													
つ	*		ぬ		べしかり めり めきけり る	き	けり	けむ	む	まし	らむ らし(大和)													
ざり			*		べし なり-し なり	き	けり	けむ	む	まし	らむ らし(重之集)													
べかり			ず		なり	き	けり	けむ	む	まし	らむ													
まじかり			*		べまじり まじり	き	けり																	
なり			*		めり	き																		
めり			*			き																		

娘サンヲ大勢オ持チダトノ評判ノヨウデスネ」の意)の例があるので、その順に従った。「集へらる」が終止形であることに注意してほしい。^[4]のグループについては、古代的用法とはいえず、「ケ^aマク・ケラシ^c」があり、長く用いられた「ケム^a」もあるので、その順に並べた。

* * * * *

今これに従って「源氏物語」を中心に平安期の助動詞連接表を作ってみると、第2表のようになる。たとえば「ぬ・たり・べかめれ」とあるのは「なり¹にた¹へか³めれ³」(かげろふ)であり、「ぬ・ぬ」「つ・ぬ」とあるのは、それぞれ次の後撰集の用例である。

○道知らで止みやはしなぬ、¹逢坂の関のあなたはうみといふなり²
(松尾聡氏「国文法入門」81頁)

○かくながら散らで世をやは尽してぬ、²花の常盤¹もありと見る

べく (前掲書78頁)

(ただし、松尾氏は、これを反語に取っているが、疑問と見なくては筋が立たない。)

「り・らむ」は「誰見よと花咲けるらむ」(古今集)であり、「なり・めり」は前掲「集へらるな(ら)めり」(宇津保)の例である。要するに①④には連用形、②③には未然形、③④には終止形と変化させて見ていただきたい。用例のほとんどは源氏であり、所々「古今・後撰・大和・うつぼ・かげろふ」から取った。だから、大体、西暦一〇〇〇年前後の連接表である。

(*印を附したものは、語の性質上ありえないもの(以下同))
つきに「うつぼ物語」の一部(岩波大系本I)と「かげろふ日記」における連接を表に示してみると、第3表、第4表の如くなる。

今これらが大観して見るため、「り」系「ぬ」系等々と小計し、その合計を出してみると、第5表の如くである。源氏の数は、池田龜鑑「源氏物語大成」索引篇・巻五による。

第5表 うつぼ・かげろふ・源氏の助動詞連接数比較

	うつぼ	かげろふ	源氏
り	33	8	275
ぬ	202	272	1,780
たり	66	88	633
つ	55	50	521
ざり	118	53	474
べかり	15	22	215
まじかり	1	1	37
なり	0	0	1
めり	3	5	50
合計	493	499	3,986

大ざっぱではあるが、「かげろふ」は岩波大系本で約200べ、「うつぼ」Iは400べ、源氏は2000べである(もともと宇津保の2べは1.5べと計算し、何字詰めということも考慮に入れたが、今は大体のところを言う)。この事からすぐ了解できることは、「かげろふ」にあつては「うつぼ」の二倍の連接助動詞が使われており、その使用度は源氏をもややしのいでいることである。連接助動詞の使用度という点では、おそらく「かげろふ」は我が国随一のものではなからうかと想像される。「かげろふ」の連接助動詞は源氏の1/10の量でしかるべきなのに、実際は1/5の量をもつが、「ぬ」系の使用度は全

第3表 「うつぼ物語Ⅰ」(岩波大系本)の助動詞連接表

	完了	打消	推定	過去	けり	けむ	仮想	まし	推想	計
リ	リツル	ラズ	ルナル	リシカ	リケル		ラム	チマシ		33
	ニタル		ニベキ	ニシカ	ニケル	ニケム	ナム			
	ニタレ		ニベク	ニシカ	ニケル		ナム			
	ニタリ		ニベカ	ニシカ	ニケル		ナム			
タ	タリ	タラズ	タメル	タリシカ	タケル		タラズ	タマシ	タラズ	202
	タリ		タメル	タリシカ	タケル		タラズ			
	タリ		タメル	タリシカ	タケル		タラズ			
	タリ		タメル	タリシカ	タケル		タラズ			
	タリ		タメル	タリシカ	タケル		タラズ			
	タリ		タメル	タリシカ	タケル		タラズ			
	タリ		タメル	タリシカ	タケル		タラズ			
	タリ		タメル	タリシカ	タケル		タラズ			
	タリ		タメル	タリシカ	タケル		タラズ			
	タリ		タメル	タリシカ	タケル		タラズ			
ツ	ツ		ツキカ	ツシカ	ツケル		ツム	ツマシ	ツラズ	66
	ツ		ツキカ	ツシカ	ツケル		ツム	ツマシ	ツラズ	
	ツ		ツキカ	ツシカ	ツケル		ツム	ツマシ	ツラズ	
	ツ		ツキカ	ツシカ	ツケル		ツム	ツマシ	ツラズ	
	ツ		ツキカ	ツシカ	ツケル		ツム	ツマシ	ツラズ	
	ツ		ツキカ	ツシカ	ツケル		ツム	ツマシ	ツラズ	
	ツ		ツキカ	ツシカ	ツケル		ツム	ツマシ	ツラズ	
	ツ		ツキカ	ツシカ	ツケル		ツム	ツマシ	ツラズ	
	ツ		ツキカ	ツシカ	ツケル		ツム	ツマシ	ツラズ	
	ツ		ツキカ	ツシカ	ツケル		ツム	ツマシ	ツラズ	
ザ	ザリ		ザルナル	ザリシカ	ザケル	ザケム	ザラム	ザマシ	ザラズ	118
	ザリ		ザルナル	ザリシカ	ザケル	ザケム	ザラム	ザマシ	ザラズ	
	ザリ		ザルナル	ザリシカ	ザケル	ザケム	ザラム	ザマシ	ザラズ	
	ザリ		ザルナル	ザリシカ	ザケル	ザケム	ザラム	ザマシ	ザラズ	
	ザリ		ザルナル	ザリシカ	ザケル	ザケム	ザラム	ザマシ	ザラズ	
	ザリ		ザルナル	ザリシカ	ザケル	ザケム	ザラム	ザマシ	ザラズ	
	ザリ		ザルナル	ザリシカ	ザケル	ザケム	ザラム	ザマシ	ザラズ	
	ザリ		ザルナル	ザリシカ	ザケル	ザケム	ザラム	ザマシ	ザラズ	
	ザリ		ザルナル	ザリシカ	ザケル	ザケム	ザラム	ザマシ	ザラズ	
	ザリ		ザルナル	ザリシカ	ザケル	ザケム	ザラム	ザマシ	ザラズ	
ベ	ベカリ	ベカラズ	ベカナル	ベカリシ	ベカケル	ベカケム	ベカラム			15
	ベカリ		ベカナル	ベカリシ	ベカケル	ベカケム	ベカラム			
	ベカリ		ベカナル	ベカリシ	ベカケル	ベカケム	ベカラム			
マ	マカリ		(なめりⅡ)							1
	マカリ		(なめりⅡ)							
	マカリ		(なめりⅡ)							
メ	メリ		*	メリシ						3
	メリ		*	メリシ						
	メリ		*	メリシ						

注 大系本Ⅱ,Ⅲから取ったものは、合計に入っていない。

第4表 「かげろふの日記」の助動詞連接表 (喜多義男「全篇精略日記」索引による)

	完	了	打消	推	定	過去	去	け	り	け	む	仮	想	む	ま	し	推	想	ら	む	計	
り	リツル	1	ヲ・ヌ 1			リ・シ	3	リケリ	1		ヲ・ム	2									8	
	ニタリ	26		ヌ・ベシ	5	ニキ	4	ニケリ	46	ニケム	2	ヲ・ム	2	ニケム	2						7	
	ニタル	15		ヌ・ベシ	13	ニシカ	17	ニケル	26	ニケム	2	ヲ・ム	2	ニケム	2						8	
	ニタル	12		ヌ・ベシ	6	ニシカ	9	ニケル	14			ナソトスル	1									
	ニタル	1		ヌ・ベシ	2							ナソトスル	1									
	ニタル	1		ヌ・ベシ	2							ナソトスル	1									
	ニタル	1		ヌ・ベシ	2							ナソトスル	1									
	ニタル	1		ヌ・ベシ	2							ナソトスル	1									
	ニタル	1		ヌ・ベシ	2							ナソトスル	1									
	ニタル	1		ヌ・ベシ	2							ナソトスル	1									
たり	タリツル	1		タル・ベシ	1	タリシカ	16	タリケリ	5	タリケム	2	ヲ・ム	2	タリケム	2						3	
	タリツル	10	ヲ・ヌ 1	タル・ベシ	1	タリシカ	1	タリケル	10	タリケム	4	ヲ・ム	4	タリケム	4						5	
	タリツル	2		タル・ベシ	1	タリシカ	1	タリケル	12	タリケム	2	ヲ・ム	2	タリケム	2						1	
	タリツル	2		タル・ベシ	1	タリシカ	1	タリケル	12	タリケム	2	ヲ・ム	2	タリケム	2						1	
つ	*			ツベキ	2	テシカ	1	テケル	6	テケム	1	テ・ム	1	テケム	1						5	
				ツベキ	2	テシカ	9	テケル	1	テケム	1	テ・ム	1	テケム	1						4	
ざり	ザリツル	1		ザメル	1	ザリシ	1	ザリケル	4	ザリケム	2	ザ・ム	2	ザリケム	2						1	
	ザリツル	2	*	ザナル	1	ザリシ	10	ザリケル	8	ザリケム	1	ザ・ム	1	ザリケム	1						10	
	ザリツル	1		ザナル	1	ザリシ	1	ザリケル	5	ザリケム	1	ザ・ム	1	ザリケム	1						2	
	ザリツル	1		ザナル	1	ザリシ	1	ザリケル	5	ザリケム	1	ザ・ム	1	ザリケム	1						2	
べか				ベカメル	2	ベカリシ	1	ベカリケル	3			ベカ・ム	3								1	
				ベカメル	3	ベカリシ	1	ベカリケル	3			ベカ・ム	3								1	
まじり								マシシカ	3												1	
								マシシカ	3												1	
めり								メリシカ	3												5	
								メリシカ	3												5	
																					499	

体の54%、「うつぼ」「源氏」はいずれも45%なのであるから、その点が一特色となる。もっとも平安期そのものが「ぬ」系の全盛時であることは、学者の教える所でもある。ちなみに「うつぼ」「源氏」では「り」系の接続助動詞は合計の約6.7%、6.9%をそれぞれ占めるが、「かげろふ」では1.6%と圧倒的にすくない。これは物語と日記との違いでもあろうか。その「ぬ」系のなかでも「うつぼ」は「なむ」63と「にき」51系がほぼ伯仲(それぞれ1/3から1/4)するのには、「源氏」「かげろふ」では、「にけり」系が圧倒的に多くそれぞれ約1/4の435、86を数える。源氏でつぎに多いのは「なむ」258に「し」256「にたり」176であるのが、「かげろふ」では「にたり」64最も多く、ついで「なん」31「にき」30となるのを見れば、過去から読みあげられて現在に到った状況にとくに視点を合わせていることが分かるようだ。とにかく、以後、地の文で圧倒的優位を占めた「にけり」が「かげろふ」「源氏」によって用意せられた趣きは察せられよう。

西郷信綱氏は「日本古代文学史」のなかで、女流日記、とくに、「かげろふ」を評して「人間の心のひだにやどる情念の微細なうごきをうつし出すことが、この文体によって可能になった。」と言い、また「源氏」について「紫式部の精神は、内へ深まることが同時に外へひろがることでもあるという独特のしかけを持っていた」と推測されているが、日本語の助動詞の複雑な接続がその種類からも数量からもその極度に達したのが、ちょうどこの時期だったことは、おそらく偶然ではあるまい。

今、これらの接続助動詞のうち3個接続以上のもののみを表に示せば、第6表の如くである。

第6表 「源氏物語」等における3個接続の助動詞表

1)	<table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr><td>たるべし。</td></tr> <tr><td>たるべかン→</td></tr> <tr><td>ぬべし。</td></tr> <tr><td>ぬべかり→</td></tr> <tr><td>つべし。</td></tr> <tr><td>つべかり→</td></tr> </table>	たるべし。	たるべかン→	ぬべし。	ぬべかり→	つべし。	つべかり→	めり。 ※ ※ ※ つ・なり・めり・き・けり・む・まし。 めり・き・けり・む。
たるべし。								
たるべかン→								
ぬべし。								
ぬべかり→								
つべし。								
つべかり→								
2)	<table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr><td>ぬめり→</td></tr> <tr><td>たンめり→</td></tr> <tr><td>たンなり。</td></tr> <tr><td>ざンなり。</td></tr> <tr><td>ざンめり→</td></tr> </table>	ぬめり→	たンめり→	たンなり。	ざンなり。	ざンめり→	き。 き。 き。	
ぬめり→								
たンめり→								
たンなり。								
ざンなり。								
ざンめり→								
3)	<table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr><td>ざりし。</td></tr> </table>	ざりし。	ら たら					
ざりし。								
4)	<table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr><td>り→</td></tr> <tr><td>に→</td></tr> <tr><td>たりざり→</td></tr> </table>	り→	に→	たりざり→	な・む。 たら・む。 たる・らむ。 つ・らむ			
り→								
に→								
たりざり→								

※ 「き・けり・む」は、鎌倉期以後「ぬべかりし」「ぬべかりけり」「ぬべからむ」という3個接続のみが、わずかに平安期の名残をとどめたことを示す。4個接続は「に・たる・べかンめれ」(かげろふ)の1個のみである。そのつもりで、表をよんで見ていただきたい。

第7表 「今昔物語」の連接助動詞の種類

	完了	打消	推定	過去	けり	けむ	仮想む	まし	推想らむ
り	りつる		るなり	りき	りけり		ら・む		るらむ
ぬ	にたり にたなり にためり にたらむ		ぬべし ぬべかり ぬべかりし ぬべかりける ぬべからむ ぬなり, ぬめり	にき	にけり	にけむ	な・むとす な・むとす	なまし	ぬ-らむ
たり	たりつる	たらぬ	たるべき たなれ ためり	たりし	たりけり	たりけむ	たら・む	たらまし	
つ	*		つべし	てき	てけり	てけむ	てむとす てむとす	てまし	つらむ
ざり	ざりぬ ざりつらむ	*	ざるべき ざなり ざめり	ざりし	ざりけり	ざりけむ	ざらむ	ざらまし	
べかり	べかりつる	べからず	べかなり べかめり	べかりき	べかりけり		べからむ		
まじかり		*	まじかなり まじかめり		まじかりけり		まじからむ		
なり		*			*	*	*	*	*
ぬり		*	*		*	*	*	*	*

第8表 鎌倉・南北朝時代における連接助動詞

	完了	打	消	推	定	過去	き	け	り	け	む	仮想	む	ま	し	推想
り	りつる※百					りし		りけり		りけむ※百		らむ				るらむ*平
ぬ	にたり			ぬべし ぬべかりし ぬべかりける ぬべかりむ ぬなり ぬめり		にき		にけり		にけむ		なむ なんとす なんず		なまし		ぬらむ
たり	たりつる たりつらめ*平		たらず※古字	たるべし たんなり たんめり		たりき		たりけり		たりけむ		たらむ たらんず		たらまし		たららむ
つ	*			つべし		てき		てけり				てむ てんず		てまし		つらむ
ざり	ざりつ	*		ざるべし ざなり		ざりし		ざりけり		ざりけむ		ざら・む		ざらまし		ざららむ
べかり	べかりつ		べからず			べかりし		べかりけり		べかりけむ		べから・む				べかるらむ
まじかり		*		まじかるべき※百 まじかんなり		まじかりし		まじかりける								
なり		*						*		*		*		*		*
めり		*		*				*		*		*		*		*

(注) 文字は「太平記」に用いられた連接助動詞。※百=百座法談，古=古本説話集，平=延慶本平家物語，宇=宇治拾遺の略。

□で囲んだものは、いわばその核を作り、鎌倉期以後も用いられた2個連接の助動詞であって、とくに結合度の強いと考えられるいわば「共通項」であり、その左あるいは右の助動詞が前後に連接して3個連接を作って行く。この表には3個連接29、4個連接1が見られる。これらの連接助動詞の意義についての詳説は、のちに譲ることとし、以後どのように変化して行ったかをまず見ることとする。院政期の「今昔物語」(1110年ごろ)を岩波大系本により、19巻以後を主として当たり、ところどころ他の巻からも補なつた連接助動詞の種類は前掲の第7表で示される。数は示さない。活用形の種類も省略する。即ち「ニタリ」で「ニタル」をも代表させる。もっとも、そのままの形で出す所もある。活用の変化を示さないので、ちよつとあっさりしすぎるかも知れぬが、平安期と変わった所は「り」系がポツポツ欠けてきたこと、推定の「なり・めり」が「つ・き」に続かず、したがって上を受けるだけ(「まじか・めり」のように)になつたこと位いで余り大きな変化はこの表では見られない。「ぬ・つ」の打消「ナヌ・テヌ」は「源氏」にもなかつたのだから、問題にならない。

そこで、院政から鎌倉期を中心に南北朝前後までの助動詞連接を見てみる。資料はつぎの通り。

資料

- 一一一〇 百座法談聞書抄(佐藤亮雄 校註)
- 一一一一 打聞集(説話集研究会プリント)
- 一二〇二 古本説話集(岩波文庫)
- 一二二〇 愚管抄(同右)
- 一二三〇 三宝絵詞(山田孝雄「三宝絵略注」)

- 一二四二 宇治拾遺(岩波大系本)
- 一二五二 十訓抄(岩波文庫)
- 一二五二 延慶本平家(山田孝雄「平家物語の語法」)
- 一二五四 古今著聞集(岩波文庫)
- 一二七〇 日蓮聖人御遺文(昭七、本化聖典普及会)
- (ただし、六九〇〜一一四二へ)
- 一二八三 沙石集(岩波文庫)
- 一三七一 太平記(岩波大系本)

沙石集から太平記にかけて百年も飛ぶのは申しわけないが止むを得ない。これらを見てみると、「太平記」は、文のうまい、まずは別として、鎌倉期以後、先人の使用した連接助動詞はほとんど用いていることに気がつく。「今昔」と余り時代のちがわぬ「百座法談」「打聞集」「古本説話集」(1110以後)に見られるわずかな例をのぞけば、「り・ナリ・メリ」系のもは、連接助動詞をほとんど作らない。「り」は「リシ・ラン」の二つの連接形を残すのみとなる。「タラズ」も古本説話集の2例および明きらかにそれを写しなぞつたと見られる宇治拾遺の3例があるが、「何とも思ひたらず」「名聞にも思ひたらず」の2語に限られているから、中世には既に事実上命脈を絶つたものである。この事は、漢文訓読調の「べからず」(それは、いつも文末に位置してほとんど他の活用形がない)を除いて、打消「ず」の前に位置する助動詞はなくなつてしまつたことを告げる。思うに、平安朝においては、動詞の本体に続いて、微妙なニュアンスを持つ完了の助動詞がまず人々の発想をリードし、しかるのちに、イエス・ノーが問われたらしいのに、鎌倉期以後は、まずイエス・ノーが問われたのではなからうか、とにかく打消の助

動詞はますます動詞と密着する傾向を強め、「候はざりし」から延慶本平家の「候はなむし」へ、さらに「候はなんだ」へと展開して行ったものらしい。完了状況を表わずに力あった「にたり」も、打聞・古本説話・愚管抄・三宝絵・宇治・平家あたりまでは細々と続いているが、「成りにたり」式の成句に限られてきた。こうして、完了の助動詞内部の相互連接のうち、「たりつ」のみが残され、これと「ざりつ」「べかりつ」が向かい合う姿となる。俗語的ものいいがかなり注意を引く「沙石集」は「源氏」の四割の分量をもつが、連接助動詞の総数は814、ちょうど「源氏」の量の半分になっている。「源氏」では「ヌ」系1780、「タリ」系633で「タリ」系は「ヌ」系の約1/3だったが、沙石集では「ヌ」系197、「タリ」系154と約1/4に増加してきた。「ヌ」系の1/3は「ニケリ」の81でこの割合は平安期と余り変わっていないが、「タリ」系のうち「タリケル」型のもの114、「タリシ」型33の二つがほとんど全部である。後の二つは、室町期の講義筆記「抄物」の中で「タケル」「タシ」として盛んに用いられるに到る。ここから現代の「タ」へは、もう一歩である。が「沙石集」の「推定・仮想・推想」の連接を見ると、「ぬべし」41、「なむ」42、「ぬらむ」10に対し、「たるべく」0、「たらむ」16、「たるらむ」1で、「たる」系は劣勢、「つべし」9、「つらむ」7にも及ばぬ有り様だった。

「タリ」系連接助動詞が「ヌ」系その他を圧倒するにいたったのは、室町期の「太平記」で、ここで初めて「タリ」系534、「ヌ」系281となる。「ヌ」系の大半は「ニケリ」の型の237で、「タリ」系の主力は「タリケル」型の394だった。「タリ」10、「ヌ」5の割。(注2)

* * * * *

以上の調査は、初め助動詞連接の型の変化だけを見ようとしたものである。それを途中から種類の変化と共に、数量の変化をも見たという考えになり、全体の体裁を乱れたものにしてしまった。ただ、一つの助動詞がだめになるということは、まずその活躍範囲が狭められる点に反映するだろうし、従って複合連接助動詞をしらべることが、その面を明きらかにするだろうという、見通しだけは、今も持ち続けている。話し言葉だけの資料が豊富でない中世では、私のような行き方も許されていいのではないかと思う。

(注1) 元来「給へ」「給ふる」自体が、上から下へ与える意味の動詞「給ふ」に古代の受身の接尾辞「ユ、ユル」が付いて、「給はえ」「給はゆる」となり、これが癒着した結果、「給へ」「給ふる」となったことは、「国文学」(昭35・1)「古典における敬語意識の発生」で金田一京助氏の説いていられるところ。この終止形「給はゆ」↓「給ふ」がありえないことは、それが敬語の「給ふ」と同形になることからして、当然だと言える。この「給へ」が形の上から「助動詞」を析出できない点も、受身助動詞のみとめられない一つの証拠となる。

(注2) 「太平記」の数は、岩波大系本Ⅲによった。「平家」巻9・12のみにつき延慶本(吉沢校註)、岩波文庫の覚一本の連接助動詞を比較するに、

総字数	助動詞数	タリ系	ヌ系
約20万	1345	590 (41%)	458 (32%)
約14万	623	264 (42%)	139 (22%)

となり、連接助動詞数の半減、ヌ系の衰退を見る。覚一本のタリ系、ヌ系の割合は、ほぼ「太平記」の状態に近い。(文学部講師)